

氏名	金丸 遥
ヨミガナ	カナマル ハルカ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第622号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 可視不可視の境界線－光の透過により見える世界－ 〈作品〉 「profile」「profile2」「spiral」 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	橋本 和幸
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤崎 圭一郎
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	鈴木 太朗
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤原 信幸
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文は、透明素材の持つ一つの魅力が可視不可視の境界線にあると考え、筆者が美術作家として今まで実践して来た表現活動の記録とその表現活動へ行き着くまでの思考、軌跡を示し、考察したものである。

筆者は今まで作品を発表する場としてギャラリーや百貨店、イベントなどといった比較的短期間の展示と、マンションや病院、企業のエントランスなどといった商業施設での長期に渡る常設展示とを経験してきた。その活動の中で、作品を発表する場所や環境によって、求められる要素の違いを経験し、自身で作った作品にはそれぞれに適正があることが明らかになった。求められる環境に適した素材を模索しながら、作品を作り続ける中、当初メインで使用していた素材の樹脂からガラスに変え制作をはじめると、ガラスも素材として難しい側面を持ち合わせている。筆者は、表現者としてアートとデザイン、そして工芸という三つの視点を踏まえ自身の表現活動を見つめ直し、透明素材の持つ可能性を本論文、および博士審査展での作品を通じて示す。

第一章では、筆者が表現活動をする上での自分の立ち位置について記述し、今の活動に至るまでのルーツを紹介していく。

第二章では、筆者が制作の中で使用していた樹脂とガラスについて考察した。筆者は人の目を惹きつける立体作品の要素の一つとして、触覚に訴える作品であると考え、樹脂とガラスの特性について述べた。また、異素材同士を組み合わせた作品や透明素材の場合における接着剤の使用の有無やその際の問題点についても明らかにした。

また、透明な素材を使用し作品を発表していたデザイナーの倉俣史朗と、同じく透明素材を使用し空間演出をしている吉岡徳仁の作品を手掛かりに、考察した。

第三章では、筆者が大学院より作り続けてきた作品を三つの技法から記録する。一つ目にキルンワークによる大型鑄造作品によるインスタレーション作品《dear deer》、ガラスと膠により構成した常設作品の《scale》、そして、樹脂からガラスへ素材を変え薄型鑄造を試みた《ephemeral》。二つ目にバーナーワークとキルンワークとの組み合わせで作出した《cosmos》、見る角度により、作品の表情が変わる《profile》。

そして、最後にコールドワークにより、平面での切子作品に挑んだ《dispersion》。各技法から各作品の軌跡を示し、それぞれの特性や可能性を示していく。

第四章では、第三章で記載した作品に基づき、透明素材を使用した新たな展開として博士作品《profile》、《profile2》そして《spiral》について紹介していく。

以上のように本論文は、筆者が美術作家として表現活動をしていく中で、何故、透明素材の魅力が可視不可視の境界線にあるのかを明示し、空間の中で、可視不可視の境界線を演出する独自の方法を示し、透明素材の新たな可能性を提案していく。

(論文審査結果の要旨)

本論文は筆者がここ数年かけて行ってきた複数の作品の制作を丁寧に振り返り、ガラスやアクリル樹脂といった透明性と不透明性の両方を表現できる素材に向き合いながら、それぞれの作品で立てた問いを博士審査展出品作品に凝縮させて、可視と不可視のあいだを行き来することで生まれる独自の表現をガラス作品の中に昇華した過程を論述した、実制作者でしか書き得ない気づきと問題解決と詳細な工程が報告された独創性の高い論文として評価した。

キャストガラス、バーナーワークなど筆者が試みてきたさまざまな技法がデザインプロセスとともに詳細に記されており、筆者のコンセプトと問いの立て方と気づきと解決法が整理されて記述されている。筆者が振り返る過去作品は、依頼者のいるデザインワークが含まれており、筆者がそれぞれの仕事の制約を逆にポジティブに活かして作品を発想し、自己の表現世界を発展させてきたことが書かれており、制約を受け入れて、独自の問いを立て、工房に入り手を動かしながら問題解決していく様が描かれている点は、デザイン研究論文として評価できるものである。

経年変化の問題を解決するために、筆者がアクリル樹脂からガラス素材を使用するようになるのも、デザインを重ねる上での問題解決としての素材選択であった。また、《profile》という作品では依頼者から配られた枡を使ってくれという発注から、台を使うことで先端に球形をつけたガラスの見え方が角度によって変わることに気づき、そこで制作した小品から博士審査展に出展した作品に発展させた。本論文ではこうした筆者がひとつの問いの解決が次の問いにつながるという作品の進化があったことが論述され、ガラス工芸家のように工房にこもり制作しながらもつねにデザイン思考をもって制作にあたっていたことを伝えている。よって本論文はデザイン専攻の博士課程学位を認定するものとしてふさわしいものとする。

(作品審査結果の要旨)

2011年頃より彼女の作品を見てきたが、彼女は常に作品の最終アウトプットを重視し、作品を社会に対してアピールしていく上で何が足りないのかを常にリサーチしてきていたように思う。これまでに様々な素材を経験しガラスに行き着いた経緯も、「デザインとして社会に作品が置かれること」の意味を強く思う気持ちの現れなのだと思う。

修士修了作品であった「dear deer」という作品があるが、彼女の頭の中にもみえるカタチを、一切妥協することなく研究を重ね実現させた時は、驚きとともに感動を覚えた。ある種、思い込み、自己暗示的にも見える彼女の制作手法は、最終的に作品として実装した時に全て“真”となり、作品を通して人々を説得力あるデザインの世界導くことに成功した。

そして今回博士展出品の作品「profile」、「profile2」、「spiral」に繋がる。取手（東京藝術大学取手校舎）のアトリエ内は、まさに研究をする為の研究室と化していた。実験途中のガラスの造形やその造形型が広大に広げられ、アトリエは粉まみれ、マスクとゴーグルで白い防護服を着た彼女は、東京藝術大学で作

品について研究し、博士と呼ぶに相応しい容姿と感じた。

本研究作品「profile」、「profile2」は、これまで作品を社会に対してアピールしてきた彼女が得た、デザインのひとつの答えなのだと思う。高度な技術と経験の上に成立している作品だが、鑑賞者は技術的なことを気にすることなく作品が起こす物理的な視覚現象の美しさや面白さに驚き、それでいて作品の持つ不思議な世界に浸ることが出来る。デザインとして“日常に飾る”ことを重視していることから、作品を欲しい、と感じさせる力を持ち合わせる。

本研究作品「spiral」については、彼女の頭の中のみにあった世界がまさに現実に現れた作品と言えるだろう。この作品を創る制作過程を見るに、彼女の相当の苦勞を感じる。最終的なカタチを見据え、こうすれば出来るはず、という強い気持ちを持ち続けることで博士展に飛び出してきた本作は、まさに彼女のこれからの期待させる力を感じる逸品である。

本研究作品は、デザイン専攻の博士課程学位を認定するものとしてふさわしいものとする。彼女の作品に対する研究を続ける心が、次にどんなデザインの世界を見せてくれるのか楽しみである。

(総合審査結果の要旨)

筆者は2012年から当校のデザイン修士課程の空間・設計研究室でデザインの基礎のひとつである立体造形や空間構成の分野の研究を主に研究をすすめてきた。当初はそれらを研究する上であらゆる素材の研究から始め、ガラスや樹脂といった透明性と不透明性の両方を表現できる素材に魅力を感じ、その素材を生かす独自の表現を探求し修士修了作品であった「dear deer」という作品に昇華させメタファーとしての意味やガラスの魅力ストレートかつパワフルに大きなボリュームで表現することで内外共に高い評価を得た。デザインやアートの魅力のひとつは「見えないものや何かを感覚的に顕在化させる」ことであろう。その一端をそこでつかみ博士後期課程でさらなる研究の深化へとつながったものである。その深化の過程で透明素材の魅力は可視と不可視の境界線ではないかを見定め、なぜそこに魅力があるのか、空間の中で可視不可視の境界線を演出する独自の方法を見だし、透明素材の新たな可能性を探ってきた過程はデザイン研究として評価できるものである。

本研究作品「profile」、「profile2」の手法はたびたび発注者からの依頼で空間と共に作品を演出してきた筆者はデザイン的な思考法で制約や問題解決を図りながら進めてきたことで洗練した表現かつわかりやすい作品となり、誰もが何を表しているのかわかる作品となった。この単純さがこの作品の裏に潜む様々なメッセージや感情を観賞者にかきたてることとなり、奥行きが深い作品となった。

一方、本研究作品「spiral」は素材の限界に挑戦したことで生まれた偶然の現象が魅力的な作品である。一見ただの大きなガラスの丸玉の塊だがそこに光をあてるとまるで宇宙の創生を見るような現象がガラスの中で起こった跡が見てとれる。それは一見すると鑑賞者が気がつかないものであるがそれを認知するとその作品の価値がまるで違って見える。その認知できるかできないかが「-光の透過により見える世界-」の境界線を象徴しており、このことが今後の表現活動のさらなる深みのある可能性を示すことができたのではないだろうか。これらの過程は論文で丁寧に語られている。デザイン思考と芸術的思考を用いバランスよく研究を進め、芸術大学にふさわしい独創性高い3つの作品にまとめたことを評価した。よって本論文および本研究作品はデザイン研究領域の博士課程学位を認定するものとしてふさわしいものとする。